

『創価教育学体系』研究序説

―「新教育学建設のスローガン」について―

齋藤 正二

価値創造と価値消費との違い

僕は授業でよく、この世に「創価教育」は存在しない、存在するのは「創価教育学」だけである、と申し上げています。どういふことかと言うと、全四巻、千ページ以上もある『創価教育学体系』の中で、牧口先生は、「創価教育学」という単語は何十回と使っておられるけれども、「創価教育」という単語はたった5回しかお使いになっていない。これは重大なことです。僕がこれに気づいたのは、今から20数年前のことで、びっくりして、誇張して言えば、腰を抜かしてしまいました。創始者ともあろうお方が、なぜ「創価教育」という言葉をほとんど使っておられないのか。

学問とは“驚き”が非常に大事なんですね。自明とされていたことを徹底的に疑い、そこから自分の最大の精神力でもって、何かを見出したいと追究していく。それが学問です。しかし世の中のほとんどの人は、先輩諸学者が言ったことを一生懸命聞いて暗記することを学問だと思っている。ちなみに戸田先生は、『推理式指導算術』の中で、繰り返し「馬鹿暗記はやめろ」と言っておられます。牧口先生の一番弟子です。

牧口先生はなぜ「創価教育」という言葉をほとんど使っておられないのか。最初、いくら考えても分かりませんでした。しかし、今から10数年前でしょうか。道を歩いている時、何かの拍子に、ふと気づいたのです。牧口先生はこう考えておられたのではないか。「私は自分なりに『創価教育学』という理論を打ち立てた、あとは後輩たちが責任をもって『創価教育』を創り出してほしい」、と。

つまり、「創造」とは、無いところから生み出していくものです。先輩の言うことや本に書いてあることを暗記するだけでは、「価値消費」にすぎません。「価値消費」と「価値創造」とは違うのです。わたしたちひとりびとりが真剣に学び考えて、迷ったり躓いたりしたときには、「牧口先生ならどうお考えになるだろうか」と自問自答して、「創価教育」を文字通り「創造」していく必要があるのです。

ついでに申し上げると、よく、「創価教育学とは、どういふことなんですか？」と聞かれることがあります。そういうとき私は、「まず自分で調べて下さい」と答えています。牧口常三郎の第三

Shoji Saito (創価大学名誉教授)

*本稿は、創価大学の講座「21世紀文明論」における同タイトルの講演(2003年12月4日)の記録である。

著作『地理教授の方法及内容の研究』（1916〔大正5〕年）を見ると、「安易に人にもものを聞いてはいけない」と書いてあります。

自分で勉強しない人に限って何でも聞いてくる。それを暗記して、勉強だと思ふ人がいるんです。テレビのアナウンサーの発言に典型的に現れていますが、どんなに相手が時間を費やし、苦勞をしながら獲得したかということに対する尊敬がないから、簡単に「どう思いますか？」と尋ねるんです。今の日本ではそれが習性のようになっています。

本論の前にもうひとつお話ししなければならないことがあります。ここから先、僕は、「牧口常三郎」というふうに敬称を略して話すと思います。尊敬していないからではなく、尊敬しているからこそ、そう呼ぶのです。「ベートーヴェン氏」のシンフォニーとか、「シェークスピア氏」の『ロミオとジュリエット』とかの言い方は、歴史上の偉人に対しては誰もしませんし、かえって失礼に当たるでしょう。

牧口常三郎は創価大学の学生だけのものではないし、創価学会の会員だけのものでもない。人類のものであります。文化や信仰を同じくする人々の間で呼ぶときには、「牧口先生」と呼んで差し支えありません。しかし、歴史上の人物として、もしくは学問の世界で語るときには、それでは普遍性を持たない場合があります。かえって存在を矮小化することになるからです。もちろん、以上の話も暗記する必要はありませんが。

新教育学建設のスローガン

さて、本題に入ります。今日お話することは、『創価教育学体系』の頭のほうに書かれている「新教育学建設のスローガン」について、これまで牧口研究者たちが行ってきた解釈は訂正されねばならないのではないかと、ということです。

はじめに、「新教育学建設のスローガン」とは何か。最小限、牧口の原典を確認しておきましょう。『創価教育学体系』第1巻（1930〔昭和5〕年）から、第1篇「教育学組織論」第2章「教育学の価値的考察」の第2節をご覧ください。

牧口は、「価値哲学は最近欧米の哲学界に最も重要視される思潮であるが故に、教育学に於ても此の点から考察し、この価値原理から更に構成し直さなければならぬことを、吾々は痛切に考えるのである。因つて余は世の教育学者に否、全教育家に向つて、新教育学建設のスローガンを提唱したい」（『牧口常三郎全集 第5巻』第三文明社、27頁）と述べています。

ここも、「新教育の建設」ではなく、「新教育学の建設」と言っていることに注意してほしいと思います。牧口は、「“創価教育学”を打ち立てる際の旗印を自分は皆さんにお聞かせしよう」と言っているんです。そして、有名な、次の一節が来ます。

「経験より出発せよ。」

「価値を目標とせよ。」

「経済を原理とせよ。」

学習力に於て、教授力に於て、時間に於て、費用に於て、言語に於て、音声に於て、常に経済原理を旨とし、文化価値を目標として進め。

天上を仰いで歩むよりは、地上を踏み占めて、一步一步進め」(同、27頁)

この一節を説明して牧口は、「実に幾多の惨苦の試行錯誤の結晶たる経験を母胎とし、終局に人生の意義を決定すべき価値を目標として、更に全教育作業を通じて、近代人のみが其の絶対的偉力を認識する経済を動力として生まれ出づる科学的教育学こそ、多年架空的な教育学の去就に悩みし教育界が、久しく待望せし日輪であり全教育学徒を導く宝典でなければならない」(同、28頁)と述べています。

こうして、「一、経験より出発せよ」、「二、価値を目標とせよ」、「三、経済を原理とせよ」という3つのスローガンが掲げられました。問題はこれをどう解釈するかです。

第一スローガン「経験より出発せよ」

最初の「経験より出発せよ」から始めましょう。

この「経験」という言葉について誰もが思いつくことは、人間が意識で行っていること、つまり、見たり、聞いたり、嗅いだり、味わったり、触ったりといったことでしょう。僕たちは、「明るい、暗い」、あるいは「美しい音色がする、雑音が聞こえる」、あるいは「よい香りがする、嫌な臭いがする」等々を、ひとつひとつ自分で感じ取っていかなければならない。その感覚を通して、自分以外の、外界の存在の意味を、あるいは構造をつかんでいかなければならない。ペスタロッチ教育学でいう五感主義、感覚主義、実物主義のようなもの、あるいはベーコンやロックといったイギリス経験論哲学の主張です。牧口の第一スローガンは、当面、そのように理解して間違いではありません。

しかし、それだけでは、実は表層的な理解なのです。今まで、創価教育学を勉強した先輩たちが犯した過ちは、「経験より出発せよ」と聞いて、「経験論が全部だ」と思い込んだことです。それで、「牧口は経験主義者であった。イギリス的なものの考え方、感じ方、認識の方法を身につけた人だ。最後まで現実を重んじ、空論や観念のでっかあげを退けた経験論者である」と言ってきたのです。もちろん、それはそれで、事柄の半分は当たっています。しかし、「経験より出発せよ」という文を、それ単独で解釈するのではなく、このスローガンを含む文章の全体構造の中で解釈しなければ、けっして精確にとらえたことにはなりません。

現に、先ほども紹介しましたが、このスローガンが登場する直前の文章で、牧口がこう述べていることに注意して下さい。「価値哲学は最近欧米の哲学界に最も重要視される思潮であるが故に、教育学に於ても此の点から考察し、この価値原理から更に構成し直さなければならぬ」、と。つまり、価値哲学が現在の哲学界の中心思潮であるから、それを念頭に置きながら「新教育学建設のスローガン」を提唱したい、と言っているのです。いうまでもなくこの「価値哲学」とは、新カント派、広く言えばカント主義を指します。

そうすると、実は、「経験より出発せよ。価値を目標とせよ。経済を原理とせよ」という3つのスローガンは、いずれもカント主義を念頭に置いて提唱されたものである、との見方が成り立ちますし、むしろ、そう解釈するのが自然と言えます。イギリス経験論の枠組みだけで解釈するの

が不十分だというのは、この理由からです。

ヘルバルト経由の可能性

これは牧口常三郎の理論だけに限りませんが、あらゆる理論は、それを生み出した同時代の構造と言いますか、背景と言いますか、そういうものを視野に入れて初めて、うっすらと僕たちが知りたいと思う対象がつかめてくるんです。そうしないで、歴史的なものの社会的なものを無視して解釈すると、薄っぺらなものになってしまう。

そこで次に考えたいことは、牧口がカント主義を念頭に置いて「経験より出発せよ」と述べたとするならば、その際、参照した文献は何であったかということです。もちろん牧口は「価値哲学」と述べているので、新カント派の代表格であるリッケルトやヴィンデルバントの本であったと考えられますが、それについての細かい報告は、時間の関係で今日は省略します。その代わりに、僕が長年調べたひとつの結論を申し上げます。

それは、牧口は、大正時代に新カント派価値哲学と出会う前に、もっと先輩のカント主義哲学者であるヘルバルトの思想を通して、「経験より出発せよ」という立場を熟知していたということです。ヘルバルトは、牧口が明治中期、北海道師範学校で学び、また教鞭をとっていたころに一番親しんだ思想家です。日本ではヘルバルトというと、明治期に流行した教育学者くらいにしか知られていませんが、本当は、19世紀ドイツを代表するカント主義哲学者なのです。

ヘルバルトが生まれた1776年は、イギリスでアダム・スミスの『国富論』が出て、アメリカで独立革命が行われた年です。1841年に亡くなっています。今のリトアニアになりますが、カントの教えたケーニヒスベルク大学で、カントの哲学教授のポストを（正確には一代おいて）継承した人です。みずから「カントの嫡子」と宣言するくらい、カント哲学を消化し、発展させた哲学者なんです。

近代哲学は、カントの“批判哲学”の流れと、そこから流れを汲みながらも独立して想像力たくましい自我本位主義と言いますか、精神絶対主義と言いますか、“ドイツ観念論”を打ち立てたヘーゲルの流れとの、2つの流れがあります。やがてヘーゲルの流れからはマルクスが出て、のちに“マルクス主義”として隆盛します。その一方でカントの流れからは、ヘルバルトや、彼の影響を受けたロツェや、その影響下に今度は新カント派のヴィンデルバントやリッケルト、あるいは「相対性理論」のアインシュタインとか、そういう錚々たる人たちが出て、すばらしい仕事をしました。今は詳しくお話する時間はありませんけれど。

牧口常三郎は、ヘルバルト教育学理論を人一倍勉強した人です。牧口は『創価教育学体系』第4巻の中で、こう告白しています。自分はこれまで、教育学史上いちばん革新的な教育学思想を作ったのはペスタロッチとルソーだと思っていたけれど、だんだん勉強していくとそうではないことが分かった。ヘルバルトこそがいちばんすばらしい思想家で、革命家で、そして私にも影響を与えた教育家であることに気づいた（趣意）、と。

「哲学は経験より出発せざるべからず」

ここに、波多野精一という戦前の哲学史家を書いた『西洋哲学史要』という本を持ってきました。1901（明治34）年刊行（大日本図書株式会社）ですから、牧口が北海道から上京するころに出た本ですね。これは、明治の哲学青年や知識人、高等教育で授業を受けた人が、一度は必ず読まなければならなかった本です。あるいは学校へ行かずとも自力で勉強しようとする文学青年などが、一度は読まずにはいられなかった本でした。

波多野は、『西洋哲学史要』第2編第5章の「ヘルバルト」という項目を、次の文章で始めています。

「以爲らく。哲学は経験より出発せざるべからず。唯心論派〔＝ヘーゲル〕は一元的根本原理より出発して一切を演繹せんとせり。従て彼等は一切の差別を以て唯一原理の開展となせり。然れども唯一は如何にして夥多に開展するを得るぞ。一は如何にして多に変化するを得るぞ。甲はいつこまでも甲にて決して非甲なるあたはずとは論理学教ふる根本真理なり。唯一の絶対的原理よりして一切を演繹する一步ごとに是の根本真理を破毀しつゝ行くなり。——是の点に於てヘルバルトとヘーゲルとの反対は最も顕著なるべし。後者は矛盾を以て実在及び思惟の真相となしぬ」（同書、319頁）

ここで注意していただきたいのは、冒頭の「哲学は経験より出発せざるべからず」という一文です。牧口は、この本が出た2年後に刊行した『人生地理学』（1903〔明治36〕年）の中で、カントやヘーゲルやヘルバルトといった哲学者たちに言及していますから、執筆の際に、当時の代表的な哲学史教科書である『西洋哲学史要』をしばしば参照したであろうことは大いに考えられます。おそらく、牧口はこれを読んで、「ああ、そうか。ヘルバルトはヘーゲルのような頭でっかちの観念論者とは違い、この著者が言う如く、いちばん経験を大事にする思想家だったのだ」と気づいたのでしょう。

かりに、牧口がこの本を眼にしていなかったとしても（書誌学的に見て、牧口が哲学史を読んだとすれば、この本以外には考えられないのですが）、「哲学は経験より出発せざるべからず」というのは、当時、ヘルバルトを論じる知識人たちが共有した考え方だったわけですから、牧口がヘルバルトを勉強する際に、なんらかのかたちで同様の解説＝解釈に触れていたであろう可能性は否定できません。

自分の考えを皆さんに押しつける気はありませんが、『創価教育学体系』の「経験より出発せよ」というスローガンは、ヘルバルトの「哲学は経験より出発せざるべからず」からヒントを得たものと解釈しても、それほど無茶な断定にはならないだろうと思います。

ヘルバルトのカント主義

ところで、牧口の「経験より出発せよ」というスローガンを、ヘルバルト哲学の文脈で解釈することによって、従来の解釈と何が決定的に異なるのか。

波多野の『西洋哲学史要』は、先ほどの文章につづいてこう述べています。

「さて、哲学は経験より出発せざるべからず。然るに経験は幾多の矛盾的概念を与ふる也。矛盾を含有するものゝ其等の概念は全く拒否すべきに非ず。何となれば経験に於て与へらるゝ者なれば也。さりとて又其儘にて棄置くべきにも非ず。何となれば矛盾は論理の法則に背く者従て思惟する能はざる者なれば也。残れる道は其等を修整するにあり、矛盾を除き去りて思惟し得るやうに改造するにあり。哲学の職分は実に概念の修整 (Bearbeitung der Begriffe) にあり」(同書、320頁)

つまり、哲学は経験から出発しなければならないのだが、見たり聞いたり触ったりといったことがすでに概念の“加工”を受けて成立している。経験の与える「概念」にはたくさんの矛盾が含まれているので、そのままにしておく論理法則に背いて、思考に混乱を来してしまう。それゆえ哲学の仕事は、そうした矛盾がなくなるよう「概念の修整」を行うことにあるのだ。それがヘルバルトの立場なのだ、というのです。

こうしたヘルバルトの考えが、カントに従っていることは明らかです。ここでカントの原典を確認しておきましょう。『純粹理性批判』「緒言」の冒頭の一節です。

「我々のあらゆる認識は経験と共に始まる (anfangen)、といふことには何の疑も存しない。[…] すなはち時間的には我々の如何なる認識も経験に先立つものではない、そしてあらゆる認識は経験と共に始まる。

然し、我々のあらゆる認識は経験と共に起始する (anheben)、といつても、必ずしもあらゆる認識がすべて経験から発現する (entspringen) わけではない。何となれば我々の経験的認識ですら、我々が印象によつて受取るところのものと、我々自身の認識能力が(感性的印象によつて単に機縁を与へられて)自ら与ふるものとの結合であるだろうから[…]

(『カント著作集1—純粹理性批判(上)』天野貞祐訳、岩波書店、1921年、65-66頁)

われわれの認識はもちろん「経験と共に始まる」が、だからといって認識がすべて「経験から発現する」のではない。われわれの「経験的認識」は、われわれが「印象によつて受取るところのもの」(＝直観)と、「我々自身の認識能力が自ら与ふるもの」(＝概念)との結合によって成立するのである。そうカントは述べています。こうして、有名な「直観なき概念は不毛であり、概念なき直観は盲目である」という命題が掲げられるのです。

波多野『西洋哲学史要』のヘルバルト解説文を、このカントの文章と対照させながら読むならば、ヘルバルトの「哲学は経験より出発せざるべからず」という言葉の意味がいっそう正確につかめるでしょう。哲学は感性的な「印象」の次元にとどまってはならず、「我々自身の認識能力」をどう鍛えていくかという課題を背負っている。教育の課題もまた同じである。それがヘルバルトの言いたいことだったのです。

したがって、牧口の「経験より出発せよ」というスローガンがヘルバルトから来しているとすれば、これを単純に、五感主義、感覚主義として解釈するのは十分ではないことになります。まして、教育には「経験さえあればよいのだ」といった経験至上主義のように解釈するのは、完全に誤っていることになるでしょう。

要するに、イギリス経験論的な感覚データと、カント的な「経験」との区別がしっかりなされずに今日まで来たことが、従来の牧口解釈にも災いしたと言えるのです。

第二スローガン「価値を目標とせよ」

次に、2つ目の「価値を目標とせよ」とは、どういうことなのでしょう。

さしあたりこう解することができます。第一スローガンにあるように、教育は経験より出発しなければならない。しかし、経験されるものをすべてだとして済ませるわけにはいかない。「これはどういう臭いであるか?」「どういう音であるか?」「どういう明るさであるか?」というふうに、外界の存在ひとつひとつについて、その意義を自分の中で決めていかなければならない。あるいは、構成をしながらつかんでいかなければならない。それが大事なのだ、と。

その上で、この第二スローガンでは、文字通り「価値」という言葉が使われていますので、牧口がここで念頭に置いていたのが、当時「価値哲学」を唱えていた新カント派であったことは間違いありません。そこでこの価値哲学について見なければならぬのですが、いま新カント派といっても、若い人にはあまりご存じない方がいると思いますから、最初に少し歴史的な説明をしておきます。

先ほど、近代哲学は、カント派とヘーゲル派との、大きく2つの流れに分けられると言いました。細かく言うと、この2つがそれぞれ3つか4つの流れに分かれていきます。ヘーゲル派からは、フョイエルバッハやマルクスといった人たちが出ます。またカント派からは、ヘルバルトとショーペンハウエルといった人たちが出てきます。このカント系統の学問伝統から、価値の問題を大きく取り上げたロツツェという学者が、またその影響を受けて、新カント派の哲学者たちが登場します。

新カント派は、マールブルク学派とハイデルベルグ学派という、南ドイツの文化領域の中で発展を遂げます。マールブルク学派には、コーヘンとかカッシーラーといった学者たちがいて、ハイデルベルク学派に、ヴィンデルバントやリッケルトがいました。価値哲学で有名なのはこのハイデルベルク学派のほうです。ここからやがて社会学者のマックス・ウェーバーとか、日本から留学した経済哲学の左右田喜一郎といった、牧口常三郎にも影響を与えた思想家たちが登場しました。だいたいこのような流れを記憶の隅に置いて下されば、それで十分です。

価値意識はカントの創見

さて、新カント派の価値哲学についてですが、いま申し上げたような錚々たる哲学者たちについて詳細に論じるだけの時間は、今日はありません。その代わりに、牧口と同時代に、日本の知識人たちが共有していた「価値哲学」についての基本見解を、最小限紹介しておきます。ここに持ってきたのは、当時最も読まれ、影響力のあった哲学者のひとりである西田幾多郎の『思索と体験』(1921〔大正11〕年、岩波書店)という本ですが、この中に「現代の哲学」という論考が入っています。

牧口が西田幾多郎から直接的に影響を受けたということはほとんどありません。しかし西田は牧口の1歳上で、二人は同時代を生きました。他に牧口と同年齢の思想家には、幸徳秋水や、島崎藤村、あるいは女流作家の樋口一葉がいます。牧口は、優れた哲学者や詩人、作家たちと同時代を生きただけを知っておいて下さい。

この「現代の哲学」の冒頭部分で、西田は「独逸哲学においてコーヘンを中心とするマールブルヒ学派、ウィンデルバント、リッケルトを中心とするいわゆる独逸西南学派」が、現代哲学の重要な潮流のひとつであると述べ、まず、その由来となったカント哲学についての解説を行っています。「想うにピエチスムスの家庭に育つた敬虔なるカントは、これによつて知識の根底を明にすると共に、その限界を明にし、自然科学的法則以外に道徳的法則の根拠を立てようとしたのであらう」（同書、196-197頁）と。

自然科学が問題にする“経験”の世界とは別に、道徳が問題にする“価値”の世界があることをカントは教えてくれた、と西田は言うのです。そして、こう述べます。

「カントの純理批評によつて知識の限界が明となり、自然法を超越する善の根拠が立せられると共に、美の根拠が立せられた。所謂真、善、美の価値判断をそれぞれ互に犯すことのできない独立の根拠を有する先天的要求に基くものなることが明にせられた。今日の規範的意識或は価値意識の考は実にカントの創見によるのである。〔…〕カントによつて我は外界の権威から脱するのみならず、自然法の束縛からも脱することができた。カントは自然科学的世界の成立の基に還つて、そこに深き大なる我の自由を見出した」（同書、197頁）

つまり、現代哲学でよく価値論が問題になっているが、価値という考え方を発見したのは、西田幾多郎によるとカントのおかげなのです。経験の世界だけでは、「外界の権威」から人間は脱することができない。そこにカントが価値の世界を立てたことで、「深き大なる我の自由」というものが見出された。

自由とは、創造と言ってもいいでしょう。経験がなければ何も認識できないけれど、経験のみでは駄目なんです。人間が持って生まれた才能、あるいは能力を最大に働かせて、経験世界に向かっていく。そうすると思ひもかけない形で答えが出る。学問においても、道徳においても、芸術においても。それを、われわれは「創造」と言うんです。

西田の論考は、当時日本の知識人たちが「価値哲学」について抱いていた基本見解を代表するものと言ってよいと思います。先ほど、創価教育学の第一スローガン「経験より出発せよ」がカントに由来すると言ったのですが、こういうわけで、第二スローガン「価値を目標とせよ」もやはりカントからきていることが分かりました。

第三スローガン「経済を原理とせよ」

時間がないので、第三スローガン「経済を原理とせよ」に移ります。これは、金儲けという意味ではありません。無駄づかいをやめよ、ということです。

以前雑誌で論じたことがありますので、最小限だけ申し上げますが、これはひとつには、牧口の若い頃からの思想です。牧口は、北海道師範学校で勉強した時代に、ペスタロッチ主義の教育学者ジョホノットの『如氏教育学』という本を読んでいて、「学習力に於て、教授力に於て、時間に於て、費用に於て」無駄づかいをやめるのが「知性」である、という見解に至りました。

したがって、牧口が『創価教育学体系』で「経済を原理とせよ」と述べるとき、たしかにこの

ジョホノット教育論が前提にあったことは間違いありませんが、しかし、実はそれだけではないのです。3つのスローガンの直前のところで牧口が「価値哲学は最近欧米の哲学界に最も重要視される思潮である」と述べていることから考えると、この第三スローガンも新カント派やカント主義との関係において言われているはずで

それでは、新カント派、カント主義は、「経済」という問題とどう関係しているのか。ここで思い出していただきたいのは、牧口が『創価教育学体系』第2巻の「価値論」（1936〔昭和6〕年）を、日本を代表する新カント派哲学者である左右田喜一郎の『経済哲学の諸問題』（1915〔大正15〕年、岩波書店）という本から説き起こしていることです。

牧口はこの本について、「恐らくは近世欧羅巴の哲学界に於て最も重要視されながら最も難解とされて居る此の哲学的価値問題を本邦に紹介し提唱した初めのものであらう」（『牧口常三郎全集 第5巻』、205頁）と述べ、「当時余は氏の他の著書と共に座右を離さない一として鈍脳に鞭つて幾回も熟読したものである」（同、206頁）と回想しています。牧口が「経済を原理とせよ」というときには、左右田の『経済哲学の諸問題』がまず念頭にあったであろうと思います。

そこで、この『経済哲学の諸問題』を開いてみますと、「カント認識論と純理経済学」という論文が入っているのです。その冒頭で左右田は、「カント認識論が其の以前の学説に対抗して起りたる所以を考ふるときは、純理経済学の現状に対して多大の暗示を与ふるものがある」（同書、35頁）と言っています。

本論から左右田の発言を少し引用します。

「欲望に出發して経済の概念を形成する間に於て、一を採つて其の概念に本質的なりとし、他を然らずとし取捨をなして其の目的に進む経過を今論理的に考へて見ると、抑々此の如き取捨を可能ならしむる為めには欲望を説いて其の或る種類を以て経済的欲望なりとし、他を然らずとする其の出発点に於て、既に此の如き経過によりて得らるべき結果即ち「経済」の概念を前提して居ればこそ暗々裡に此の概念に照合して、例へば欲望とか行為とかの概念の中一を本質的なりとして之を採り、此くして此の経済なる概念の構成に資し、他の者は之に反して非本質的なりとして之を棄つるといふ取捨選択が出来るのである。即ち此の経済といふ概念に適応する様に色々の概念を作り上げて而して其の結果として最終に経済の概念を定めるのである」（同書、65頁）

つまり、これまでの経済学は「欲望」を中心に置いて理論をつくってきたが、その際、「経済」という概念に都合の良いように「欲望」の概念を作っておいて、そこから「経済」という概念を導いてきた。すなわち循環論法の過ちを犯してきた。経済学の理論を学んで皆分かった気になっていたけれど、実は根底があやふやなのではないか。経済学の概念を明治時代の幼さから脱却させなければならない。その際、カントの厳密な哲学をわれわれは参考にしなければならない、という主張です。

初期の牧口は、『人生地理学』に見られるように、アダム・スミスに代表されるイギリス経験主義の経済学にも親しみましたが、大正時代に入って、左右田を通してカント哲学に接したときの驚きはいかばかりだったのでしょうか。『創価教育学体系』第2巻では、左右田論文に触れて自分は

価値のことばかり考えるようになってしまった(趣意)、と述べています。カントを学ぶことによって真理をつかむことができるようになった、との回想です。

もともと若き日にヘルバルトを学び、ヘルバルトの背景にあったカント哲学を学んでいた牧口が、15年ほどたって左右田を通して新カント派哲学を学んだことによって、それまでの思索と重なり、価値というテーマが装いを変えて現れた。そして、ボードレー尔的に言えば、思想の旅への誘いを受けた。処女作『人生地理学』をも成り立たせていた価値の問題に入っていった。そして左右田を読みながら「価値論」を構想していった。

こうした背景を考えると、『創価教育学体系』の第三スローガン「経済を原理とせよ」は、「左右田喜一郎の哲学を参考に、カント哲学の枠組みの中で教育を考えましょう。あるいは、教育学の建設を考えましょう」というメッセージとして解することができます。

世界一流の思想を学んだ牧口

以上、簡単ではありますが、「新教育学建設のスローガン」である「経験より出発せよ」「価値を目標とせよ」「経済を原理とせよ」について、それぞれ牧口が何を念頭に置いて発言していたかを見てきました。復習しますと、「経験より出発せよ」はヘルバルト、「価値を目標とせよ」は新カント派、「経済を原理とせよ」とは左右田喜一郎をきっかけにして生まれている。そしてこれらのいずれもが、カント哲学に源を発しているのです。

牧口は、この3つのスローガンを掲げながら素晴らしい仕事をしました。そして、一貫して人間の尊さ、理性の正しさを説き、そして、平和であるべき人生、つまり、平和の推進者として一生を終えました。

ひとつ付け加えておきますが、牧口研究者の中に、「牧口はよく『幸福』という言葉を使ったけれど、それは彼が貧乏だったからだ」という人がいる。それは嘘です。アダム・スミスやカントの哲学を学んだら、いやでも幸福思想、平和思想に目覚めるのであって、牧口が貧乏だったからではありません。僕は40年間、牧口について調べましたが、牧口が貧乏だったというのは少年時代の2、3年だけです。後は、小学校の校長先生ですから、そんなに大金持ちのはずはありませんが、明日食べる物が無いという貧乏人だったことはありません。

牧口の文章が名文であるのは、やはり一定の余裕があったと思われる。貧乏で食べる物もないという、寒さに震えながら学んだ学問ではない。余裕を持って、同じ本を読むにしても、それについての本を2、3冊用意して、それらとの比較をしながら読んでいた。牧口の思想を追っていくとそうしたことが見えてきます。僕たちは印象や思い込みで短絡的な結論を出すのではなく、よく調べて、無理のない、合理的な理論を立てなくてはなりません。

ともかく、牧口思想のすばらしさは、どんな時にでも、牧口が人類史全体の最高の遺産を学んで、そこからいちばんのエッセンスを自分のものとしている点です。『人生地理学』にしても、『教授の統合中心としての郷土科研究』にしても、『地理教授の方法及内容』にしても、すべて学問的な根拠がある。人類史的な古典を学んで、自分のものとしているところがすばらしいんです。決して個人的な思いつきで書いてはいない。生まれてから2、3冊しか読まない人に限って、「オレ

は大発見したんだ」と言うものですが、愚かしいことです。たくさんの本を読んだ人が、「こんな大それたことを自分が言ってもいいのだろうか」と、謙虚な気持ちで考え、恐る恐る自分の意見を出していく。牧口常三郎はそういう方でした。

科学の事実を見れば分かります。日本の科学技術が、日本的でないといけないということはないんです。世界の技術から一生懸命学んだ結果として、いつの間にかお互いにいいものができるのです。数学者であれ、経済学者であれ、あるいは教育学者や芸術家であれ、皆そうです。ところが、今の日本は、文部科学省が学習指導要領で「伝統と文化のアイデンティティ」のために教育しようなどと言って、日本的であることがすばらしいかのように言う状況になっています。ナショナリズムを目標にするなんて愚かしいことです。

皆さんに、とくに男子学生にお話ししておきますが、いずれ日本が、たとい徴兵制を導入するような時が来ても、戦争に行っははいけません。そんなときは「あなたたち男子学生よ、逃げ回れ！」というのが、戦争を経験した僕の遺言です。皆さん、けっして人殺しに参加しないようにして下さい。そして、牧口思想、戸田思想、池田思想が百パーセント平和思想であることを、僕たちは身をもって証明しようではありませんか。ご静聴ありがとうございました。